

国語の楽しさ、

学びの楽しさって

子どもたちにとって、学びの原動力の一つが「楽しさ」であることは間違いありません。では、国語の学び、言葉の学びにおいて、「楽しさ」とはなんでしょうか。そして、それを

日々の授業の中でどのように子どもたちに伝えていけばよいのでしょうか。

四十年以上、中学校で子どもたちを見つめ続けている甲斐利恵子先生（軽井沢風越学園）と宗我部義則先生（お茶の水女子大学附属中学校）に、国語の楽しさ、学びの楽しさについて掘り起こしていただきます。

また、藤森裕治先生（文教大学）からは、学びにおける「楽しさ」と「おもしろさ」との違いについて寄稿いただきました。

なんだろう

対談

楽しい国語の授業とは

軽井沢風越学園

甲斐利恵子

お茶の水女子大学附属中学校

宗我部義則

楽しい学びって何？

—子どもが感じる「楽しい授業」「楽しい学び」とはどのようなものなのでしょうか。

宗我部 楽しい国語の授業とは、言葉の学びや活動の中にいろいろな楽しさがあることかなと思っています。例えば、文章を読んで新しい知識を得る楽しさもあるでしょうし、活動自体が楽しいということもあるでしょう。ただ、活動の奥に「わかった！」「できた！」という楽しさがあるのが大事ですね。

甲斐 国語が苦手な子どもは、途中でわからなくなったり、めんどくさくなったりして、嫌いになるのではありません。本当は「できたらいいな」「楽しみたいな」「わかりたいな」と思っているんです。嫌でや

りたくないというより、やりたいのにできないから楽しくない。だから、「苦手だけど、これならちよつとできるかな」みたいなきっかけを作れば、楽しく学べるようになると思っています。

宗我部 まさに、そのとおりですね。「ああ、なんかわかりそう。もう少しでできそう」というときに、グッとスイッチが入る感じですね。

甲斐 もちろん、子どもが感じる楽しさというのは多様ですから、みんなが楽しく感じられるようにするのは難しいですね。一人一人、すべての子どもに合わせていたら、振り回されてしまいます。

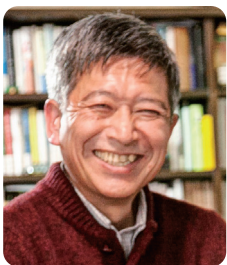
宗我部 私も一時期、群読の指導に夢中になっていたとき、ある先輩の先生から、「君はもしかしたら、クラスの全員に群読を楽

しいと思わせる授業をしようとしてないかい」と言われました。私が、「みんながそう言ってくれたら、うれしいと思っています」と答えたら、「それをファシズムという」とご指導をいただいたことがあります。「群読を楽しんでいる子どもたちもたくさんいるだろうけれど、一人で読みたいという子もいるでしょう。自分は苦手だという子がいても、それでいいんじゃない？ 次の単元では、その子が楽しいと思える授業を工夫するといひのです」と。

ある子どもが楽しいと思っていなくても、他の誰かはちよつと違うと感じている。でもトータルとして、「国語の時間って楽しいことが多い」と思えて、嫌いにならなかつたら、まず成功なのではないか。その言葉をきっかけに、そう考えるようになりました。

甲斐 「楽しい学び」とはこうでなければならぬ、という決まりはないですからね。だから、私は、教師自身が本気で楽しいと思う活動や素材を提供してみることがスタートだと思っています。それを子どもたちにもやりたいと思わせるには、どんな仕掛けをすればいいかなと考えることが大事かな。

宗我部 そうですね。先生が、「これ、楽



若い先生たちこそ、
いろんなチャレンジをしてほしい。

宗我部義則

埼玉県生まれ。光村図書中学校「国語」教科書編集委員。平成20年告示中学校学習指導要領解説国語編作成協力者。編著書に『群読の発表指導・細案』（共著・明治図書出版）、『中学校国語科新授業モデル 話すこと・聞くこと編』（共編著・明治図書出版）など。

——甲斐先生、宗我部先生は「楽しい授業」のヒントをどこで見つけていらっしゃるの

「楽しい授業」のヒントはどこにある？

宗我部 そういう意味では甲斐先生も、子どもたちがふだん話している言葉ではなく、例えば「文学を語るための言葉」に触れて、それを使って批評をするなどの授業をされていますが、それが子どもにとって120%の山になるのですよね。

甲斐 つまりそれは、子どもたちが今、どのくらいの力をもっているかを、宗我部先生が知っていたということではないかと思うのです。だから、いつも登りたくなる山を作る人は、子どものことをちゃんと見ている人だと。そういう先生が、子どもに楽しさを生み出す力を与えられるんだろうなと感じました。

ですか。

甲斐 私の場合は、本屋さんが多いですね。ただ、本そのものではないこともあります。ふらっと寄った本屋で立ち読みをしていたとき、すぐ近くのコーナーでスピードラーニングのデモをやっていたんです。「アイハブアペン……私はペンを持っています」みたいな感じで、英語と日本語が交互に流れてくるんですね。そのとき、「これって古典の朗読で使えるかも」とひらめいて、「おくのほそ道」リレー朗読の授業が生まれました。

ペアになって、一人が「月日は百代の過客にして」と古典の原文を読んだ後、もう一人が「月日は永遠に旅を続ける旅人のようなものであり」と続ける形式です。これだと、クラス全員に朗読する機会を設けられて、しかも聞いている他の子どもも内容やリズムを学ぶことができます。

宗我部 私が「ダイコンは大きな根？」の

——そうしたヒントが、すぐに実践に結び付いていくのですか。

甲斐 大村はま先生は、「この教材が使える

大村先生にはなるのは難しい

甲斐 ふだんの生活の中にもたくさん教材や指導のヒントはありますよね。大事なものは、まずは視野を広げて、自分が興味をもっていることですね。

授業で子どもたちに示した「ニンジンとカブはダイコンとよく似た根菜だけど、どこまでが根でどこから茎か」という話題は、職員室のおしゃべりの中で理科の先生からいただいた「根菜うんちく」です。「君は『最後の晚餐』を知っているか」で扱った修復前と後の二枚の「最後の晚餐」の絵は、美術の先生との会話から。職員室のおしゃべりは、授業のアイデアの宝庫です。

宗我部 そういう登りたくなるような山がちゃんと見えてきたときに、なんとか越えてやろう、なんとか達成してやろうと、子どもたちは本気になりますね。そこに「本気スイッチ」が入り、本当に楽しい世界に入っていくとする姿が現れます。

甲斐 ノーベル賞を受賞した田中耕一さんが「120%の設定力」ということをおっしゃっていました。100%でも150%でも200%でもなく、120%を考えて自分に課題を課していたのが成功した原因だと。自分が目ざすレベルを知っている人は、どんなことがあっても大丈夫なんですよ。それを知らない人は、例えば急に勉強するぞと徹夜して、三日も続かないうちにダウンする。

宗我部 いろんな楽しさがありますよね。ただただガハハと笑いたくなるような楽しさ

「楽しさの質」とは

——楽しいだけで、実はほとんど学びがない授業になってしまったという反省を聞くことがあります。

甲斐 わからせよう、覚えさせようと思っている先生よりも、楽しもうぜって思っている先生の授業のほうが子どもたちにとってずっといいのは、そのとおりです。ただ、その「楽しもうぜ」の裏側で、それが学びにつながっているかどうかをしつかり見極めていかなければなりませんからね。つまり、「楽しさの質」というのが、大きなポイントになります。



自分の「楽しさ」を仕事にできる。
国語の教師って本当に楽しい。

しいはずなんだけど……」と、迷いながらやっているようだったら、子どもたちも不安にこそなれ、楽しめないですよ。

さもあるだろうけれど、知的に楽しいと思ってもらえることが授業の役割だと思います。自分が知らなかったことがわかったとか、できるようになった、知識が増えた、ちよつと成長できた気持ちになったとか、そういう楽しさを国語の授業で体験させてあげたいと思います。

甲斐 ガハハと笑わなくても、楽しいという感覚や充実感で自分が満たされていくことを覚えたなら、もう元へ戻れないんですね。「知」というものに向かっているかどうかというのは、すごく大切な要素だと思います。そういう楽しさを切実に求めている子どもからすると、やらされている感じがたえない授業では楽しさは感じられなくなります。困難はありそうだけれど、登りたくなるような山がそこにあるというのも、すごく大事な楽しさにつながっているんです。

甲斐利恵子

福岡県生まれ。東京都内の公立中学校勤務の後、現職。光村図書中学校「国語」教科書編集委員。著書に、『子どもの情景』（共著・光村教育図書）、『聞き手話し手を育てる』『中学校国語授業づくりの基礎・基本』（ともに共著・東洋館出版）など。

ると思ったら、必ずすぐ使うことを禁じます」とおっしゃっています。

宗我部 なるほど。

甲斐 そこが私たちと違うところなんですよ。私は、おもしろいと思ったらすぐ教室で「ほらほら、おもしろいでしょ。やってみようよ」となっちゃいます。

宗我部 やりたくないっちゃいますよね。

甲斐 やっぱ大村先生にはなれないですね。

宗我部 でも確かに、おもしろそう思ったものをすぐに教材化するのは難しいことがありますね。先日、お茶の水女子大附属中学校の公開研究会で、写真集に詩句を添える授業を行ったのですが、構想から三年ぐらいかかっているんですよ。もともと発想の種は、たまたま出かけた写真展で見つけた写真集でした。片側のページに写真があり、もう片側のページに小澤征良さんが一行ずつ詩を添えているものです。ストレートな写真の説明ではなく、よい距離感をもった詩の言葉なんです。これはおもしろいと思ったのですが、同じ写真集を使って子どもたちに詩を作らせても、どう考えても小澤さん以上のものは作れないだろうなとも考えました。そのまま寝かせて温めて、昨年の春、これならできると考える写

げてほしいですね。

私は若いころ、研究授業で「平家物語」を、子ども向けの絵本だけを使ってやったことがあります。自分ではおもしろいなと思っていたのですが、「それって古典の授業じゃないでしょう」と指導主事の先生や先輩たちから言われました。でも、指導主事の先生は「十年たつて同じようなことをやっているじゃだめだけど、今、自分で教材を見つけてきてチャレンジしたというところが大事です」と言ってくださいました。それが今の私をつくっている根っこかなと思っています。

甲斐 そういう若い方の前向きな思いを大切にしてくださる人の意見は本当に大事だと思います。

宗我部 ベテランの先生方には、若い先生たちがいろいろチャレンジしていくのを見守る目というものをぜひ意識していただきたいですね。若い先生こそが自分で楽しんで授業をやっている学校にしていってほしいなと思います。

甲斐 若手に限らず、教師一人のアイデアには限界があります。子どもたちも友達がいるからこそ力がついたり、学ぶことの楽しさを知ったりするんですね。そのことを大人の世界に敷衍して考えてみると、やっ

写真集『ST KILDA（セント・キルダ）』を見つけて、ようやく三年かけて実践にこぎつきました。

見つけた素材に、これならいけるかもっていう見極めがつく瞬間があるんじゃないですかね、教材の発掘って。それは教材自体を見つけた瞬間かもしれないし、本当においしく食べるための味付けのしかたを思いついた瞬間かもしれません。

楽しさは主体性にあり

——大村先生の実践から学ばれたことは多いのですね。

宗我部 本当にいろいろなことを学びました。例えば、大村先生は、課題を出すときにいくつか選択肢を提示されます。そして、そうした課題の最後に子どもたちが自分で考えてもいい選択肢を置かれるんです。子どもが自分で考えた課題に取り組むという「主体性」の尊重ですね。そこから子どもが本気になり、楽しい授業へと発展していく。**甲斐** 選ぶという行為が、子どもたちの機動力にもすごく関係しているということとは感じますね。「この課題でやってみて」と言うのではなくて、「どれにする？」と言っただけで、もう全然、子どもたちの学

習意欲は違ってきます。

宗我部 AとBとどっちでやる？というだけでも、子どもたちの主体性は動き始めると思いますが、AでもBでもないCを自分ならこうやるという思いが芽生えたとき、まるで子どもの動きが違ってくるんですよ。おもしろいですね。

甲斐 こういうことに取り組ませ、こういう力をつけたということ、きちんと目標を立てて実践することは大事なことです。けれども、そこに子どもたち自身が選んで取り組むという主体性があるほうが、もっともつと学びの可能性は広がるように感じます。

楽しい授業のために「急がば学べ」

——先輩教師として、若い先生方にぜひ伝えたいことはありますか。

宗我部 若い先生たちには、まず基本的な授業ができるようになることが大事だという考えもあります。でも、若い先生たちにこそ、いろんなチャレンジをしてもらいたいと思います。失敗したっていいと言うのは子どもたちに対して失礼かもしれません、少なくとも周りが長い目で見守ってあ

ぱり学び合う仲間がいるということが大切なんです。まずは、そうした勉強の場を求めて動いてみる必要があるのではないかと思います。若いアイデアを大切にと言う人もいますけれど、勉強してない人は若くても年取っていても、アイデアなんか浮かびません。

「急がば学べ」が大事です。

宗我部 自分が楽しみ、楽しい授業を作るためには、まさに「急がば学べ」ですね。

甲斐 私がもし一人でやっていたら、ただがむしゃらに自分がいいと思うことを子どもに押し付けるタイプの先生になっていたかもしれないなと思います。実際には、勉強会の中で、自分の毎日の仕事、実践を通

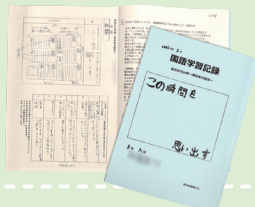
して困っていること、よかったことを言葉にして聞いてもらっていました。アドバイザーをもらうチャンスがあったのが、自分自身の楽しさにもつながっていたような気がします。自分の世界をどんどん広げていくチャンスに、どう関わり続けられるかが、楽しむ力につながりますよね。**宗我部** 今日の対談でいちばん強く感じたのは、やはり自分自身が楽しむことが楽しい国語の授業作りの根っこだろうということですね。そしてそのために、いろいろな苦勞を乗り越えていくことも楽しむということですね。**甲斐** 自分の「楽しさ」を仕事にできる。国語の教師って本当に楽しいと思います。

実践紹介

▼甲斐先生

子どもの中で生まれてきた感情をどのような言葉で言い表すのかに着目し、「学び続ける力」を育てていく実践です。

「生まれ出る思い 生まれ出る言葉」
あれから10年—東日本大震災—



▼宗我部先生

この対談でも話題となっていた「知らない世界、知識にふれる楽しさ」をテーマにした実践です。

説明文の読みの学習をもっと楽しく
「ダイコンは大きな根？」

